

M-GTA 研究会 News letter no. 53

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：grounded@ml.rikkyo.ac.jp

研究会のホームページ：<http://www2.rikkyo.ac.jp/web/MGTA/index.html>

世話人：阿部正子、小倉啓子、木下康仁、小嶋章吾、坂本智代枝、佐川佳南枝、竹下浩、
塚原節子、都丸けい子、林葉子、水戸美津子、三輪久美子、山崎浩司（五十音順）

<目次>=====

◇お知らせ	...	1
◇第 56 回定例研究会の報告	...	2
【第 1 報告】	...	3
【第 2 報告】	...	8
【第 3 報告】	...	17
【第 4 報告】	...	22
◇第 4 回修士論文発表会のご案内	...	27
◇編集後記	...	27

=====

◇お知らせ

- 近日中に、研究会ホームページの会員専用ページにログインする際に必要なパスワードが変更となります。（ユーザー名は変わりません。）後日、研究会メーリングリストでお知らせします。なお、ユーザー名とパスワードは会員限定です。非会員の方には絶対に教えたり伝えたりしないでください。よろしくお願い致します。
- 第 57 回定例研究会が、2011 年 5 月 28 日（土）13:00～18:00 に、立教大学（池袋キャンパス）で開催されます。プログラムのご案内や参加登録は、後日メーリングリストおよびホームページでお知らせします。なお、今回は年次総会を本会前に開催します。

◇第 56 回定例研究会の報告

【日時】3月5日(土) (13:00~18:00)

【場所】立教大学(池袋キャンパス、14号館、D501)

【出席者】

会員<72名>

・阿部正子(筑波大学)・岩本操(武蔵野大学)・大西潤子(青梅市立病院)・大矢英世(東京学芸大学)・小倉啓子(ヤマザキ学園大学)・加藤千明(浜松医科大学)・木下康仁(立教大学)・小石恵美子(大田区特別養護老人ホーム羽田)・小坂恵美(千葉大学)・佐川佳南枝(立教大学)・菅野摂子(立教大学ほか)・高橋由美子(浜松医科大学)・都丸けい子(平成国際大学)・中西啓介(信州大学)・長山豊(金沢大学)・福元公子(首都大学)・松戸宏予(佛教大学)・光村実香(金沢大学)・三輪久美子(日本女子大学)・山崎浩司(東京大学)・和田美香(厚木市立病院)・浅川典子(埼玉医科大学)・石原眞理(神奈川県立川崎図書館)・井潤知美(中央大学)・稲垣尚美(横浜国立大学)・今泉郷子(武蔵野大学)・内野小百合(埼玉医科大学)・梅原佳代(国立看護大学校)・坂本智代枝(大正大学)・大賀有記(ルーテル学院大学)・大久保義美(愛知みずほ大学)・大澤千恵子(淑徳大学)・大橋重子(法政大学)・荻野剛史(東洋大学)・貝塚耀子(白百合女子大学)・風岡公美子(獨協医科大学越谷病院)・神田雅貴(埼玉県川島町教育委員会)・菊池真実(早稲田大学)・倉田貞美(浜松医科大学)・小嶋章吾(国際医療福祉大学)・齋藤公代(わかば訪問看護ステーション)・佐鹿孝子(埼玉医科大学)・志賀朋美(北里大学)・杉山智江(埼玉医科大学)・鈴木京子(成蹊大学)・田内ますみ(神奈川大学)・竹下浩(ベネッセコーポレーション)・谷口須美恵(青山学院大学)・丹野ひろみ(桜美林大学)・塚原節子(岐阜大学)・辻野久美子(山口大学)・土居照代(聖徳大学)・富澤涼子(国立精神神経医療研究センター病院)・鳥居千恵(聖隷クリストファー大学)・中村聡美(NTT東日本関東病院)・根本愛子(一橋大学)・馬場芽(北海道大学)・浜崎千賀(北原脳神経外科病院)・原理恵(九州看護福祉大学)・肥田幸子(愛知東邦大学)・廣瀬眞理子(関西学院大学)・藤永直美(東京都リハビリテーション病院)・堀圭介(富士大学)・眞崎直子(日本赤十字広島看護大学)・松崎吉之助(横浜国立大学)・松本義明(早稲田大学)・三浦千加子(聖徳大学)・三沢徳枝(創造学園大学)・水戸美津子(自治医科大学)・目黒明子(相州病院)・森實詩乃(東京工科大学)・唐田順子(西武文理大学)

非会員<11名>

・野山修(杏林大学)・磯崎京子(早稲田大学)・ト部吉文(大橋病院)・沢田英一(清水建設技術研究所)・西野明樹(目白大学)・伴佳子(順天堂大学)・山本佐枝子(国立国際医療研究センター)・岩崎多津代(順天堂大学)・安藤里恵(岩手県立大学)・池田広子(立教大学)・佐々木久美子(東北大学)

【第1報告 研究発表】**「ホスピス看護師が熟達していくプロセス—死生観の変化に着目して—」****大西潤子(青梅市立総合病院 看護師)****1. 研究の背景**

終末期のケアと看取りは、近代医療が展開される以前にはコミュニティで支えられ、家族や地域にその時の援助の方法が伝承されてきた。しかし近代医療の開始以来、「死」は施設内に囲われ、現在家族やコミュニティにそれを支える力は減少し、死にゆく人とその周囲の人も含めて終末期ケアの対象と考えられている状況がある。

患者は一人一人歩んできた人生が違い、価値観にも個別性があることから、終末期の看護には、急性期における疾患の治療を促進させるという一つの目的を果たすことにとどまらない支援が求められる。すなわちそれぞれの目的達成に応じたケア、看護の質が問われることにより、終末期看護は、それを担う看護師にとって負担の大きい分野となっている。しかし、看護師になる若者にも多くの看取り経験があるわけではなく、看護師自身も身近に死を経験することのないまま終末期の看護に携わることがしばしばである。

看護学のテキストには、「看護師は死生観を持つべきである」とか先行研究では、「終末期看護においては、看護者自身が強い無力感・喪失感からストレスや外傷を負わないためと、逃げの姿勢ではなく質の高い終末期ケアを提供するために確固たる死生観を持つことが勧められている。」などとある。また、筆者がまとめた文献研究においても、看護師の死生観が終末期の看護のあり方に大きく関与していることが読み取れた。しかしこれらの研究の中には、死生観を形成する要因を抽出するものや「死」観を「看取り」の場面から探求するものはあったが、終末期看護に携わる中で、看護師の死生観がどのような過程を経て変化していくかに注目したものはなかった。そこで、終末期のケアに熟達しているホスピス・緩和病棟に勤務する看護師(ホスピス看護師)が、どのような過程を経て現在に至っているかを死生観の側面から明らかにすることにした。彼らがどのように死生観を変化させ、終末期看護に熟達していくかのプロセスを明らかにすることで、一般病棟とりわけ急性期病棟で終末期看護に携わる看護師にも、死生観の広がり、ひいては看護の熟達を促す支援を見いだすことができ、看護師としての成長への意図的な関わりができるのではないかと考える。

2. M-GTAに適した研究であるかどうか

本研究は、ホスピスの看護師がともに働く医療チームのメンバーとともに患者やその家族に直接働きかけたり、影響を受けたりしながら、認識や行動が変化していく過程のプロセス性を重視するものである。また本研究は、明らかにしようとする変化の側面が「死」を扱うもので、分析焦点者の発言には隠語や代名詞が多く含まれている。対象者が語る文脈全体から意味を分析する必要があることから、切片化を行わない M-GTA に適した研究であると考えられる。

3. 研究テーマ

本来の研究動機は、看護師の持つ死生観の変化を明らかにしたいというものであり、従来は、「終末期看護に携わる看護師の死生観形成のプロセス」としていた。今回の分析では、分析焦点者が広く終末期の看護について語っており、語りのデータに基づいて分析を進めた結果、

ホスピス看護師が熟達していくプロセスー死生観の変化に着目してー となった。

4. 分析テーマへの絞込み

データを読み返し、分析焦点者の語り全般に関心を向けた。結果、看護師としての戸惑いとその対処がわかり抜け出す姿や医療チームの関係性、また具体的なケア場面における患者・家族とのやりとりが多く語られていることに気づき、分析テーマをホスピスの看護師が、死を恐れず チームの一員として、個別性に基づくケアができるようになるプロセスとした。

5. データの収集法と範囲

1) データ収集法：半構成的面接のデータである。面接は一人につき 40～80 分程度、病棟にある個室にて 1:1 で行った。内容は、承諾を得て録音し逐語録を作成した。

2) データ収集期間：2006 年 8 月～2007 年 2 月

3) 面接内容：研究の趣旨を説明する際「死生観」は「死や生のとらえ方・死と生にまつわる価値や目的などに関する考え方で、感情や信念を含む行動への準備態勢」とする旨を伝えた後、① 終末期の看護で印象的な患者およびそのケアにまつわるエピソード、その時の気持ちや感情を語っていただいた。②患者と死後の世界観に関する話を話したことがあるかと看護師自身の死後観 ③看護師自身の終末期看護を支えているものの存在についての語りを聞いた。④死生観の定義を示し思いつくことを何でも語っていただいた。

6. 分析焦点者の設定

分析焦点者：ホスピス・緩和ケア病棟に 3 年以上勤務した経験のある看護師

(都内 3 施設の 8 名、看護師歴 8～29 年 平均 17 年)

<3 年以上の理由>

P. ベナーは、「言われて行う」レベルから計画を立てて看護するという一人前レベルへと成長するのが、似たような状況で 2～3 年働いた看護師であるとしている。(略)また、国内における看護の自律性に関する報告では、臨床を経験した看護師は自律性の要因である知的能力、実践能力、具体的判断能力、抽象的判断能力、自立的判断能力いずれも、経験 3 年を境に大きく高まる(菊池, 1997)といわれている。ホスピス・緩和ケア病棟における 3 年以上の経験から、「一人前」になるまでの一定の経験を経ているものと判断し分析焦点者

を3年以上とした。

7. 分析ワークシート：別紙にて提示

8. カテゴリー生成：別紙にて提示

9. 結果図：別紙にて提示

10. ストーリーライン

ホスピス看護師が熟達していくプロセスは、結果図に示すとおり【終末期看護のとまどいと葛藤】、【終末期患者のそばで行う看護努力】、【生と死の直視】、【終末期看護の熟達】の4つのカテゴリーで表される過程に、【患者・家族との関係の発展】と【医療チームの一員としての成長】の2つのカテゴリーが相互に作用して発展すると考えた。(以下省略)

12. 疑問点など

一つの概念が説明できる範囲：多くの概念が生成された。(分析テーマが大きすぎたか?) 概念間にも関係性が見いだされサブカテゴリーを作っていたが、それでも数が多く今回は、概念の中の側面としてとらえることにした。正しいやり方だったのか。

研究会質疑応答

◆研究者の今の立場は?・研究を始めた動機は?・現場での課題は?

「研究の背景」に研究を始めるきっかけや、現在感じている課題が示されておらず、現場や看護教育の中にこの結果がどう戻されていくのかわからない。M-GTAでは、研究する人間と研究との関係を明確にして研究していくことが大事である。そこを明確にしてあれば、概念がたくさんできることはないと思う。焦点の絞り方が緩いのではないのか。

・・・資料の「研究の背景」では、一般的な事柄しか示さず、自分自身の問題関心がありませんでした。しかしご指摘を受け、その動機の部分を分析テーマの中心におかなければならないことに気づきました。概念として生成するか否かの判断も、分析テーマが漠然としていることが原因で甘くなり、多くなってしまったと考えられます。

◆「終末期看護に熟達していく」ということがわからない。死を恐れなくなっていく前提があつてのことか?

死生観成長も終末期看護の熟達もプロセスを見ていくためには、漠然としている。分析テーマにある「死を恐れない」ようになることが、「熟達」ということなのか。

・・・死生観の成長よりも終末期看護の熟達は、抽象度が下がると考えました。またその内容として、死を恐れなくなるホスピス看護師の発言があつたことから、分析がある程度進んだ段階でより具体的な現象を表わそうと分析テーマに加えました。しかし死を恐れないことや、チームの一員としてという表現を分析テーマに入れることは、分析する前か

ら限定をかけた形になることが指摘され、結果として言えることであっても、それが前提であるような表現とはしないことが重要と理解しました。

◆死生観を確立すべきものと看護の世界ではとられているのか？ 迷いながらもいい看護ができるかもしれない。この研究が目指すところ、死生観はこのようなプロセスで確立していかなければいけないという指針のようなものを考えているのか？ 結局この研究では何が一番わかって、何を臨床の知として言いたかったのか？

・・・研究者自身は、確固たる死生観をもつために指針を示そうとしているのではない。しかし看護者は死にゆく人(死を意識して生きる人)が充実した時間を過ごす支援をする為、いたずらに死を恐れず自由にコミュニケーションできる存在であることが重要と考えます。今回、看護師は人生に関する価値観が個々様々であると知り、終末期看護を通して自身をも振り返ってとらえ直したり、死を直視しつつ看護活動していることがわかりました。また彼らの価値観は、患者・家族や医療チームとの関わりの中で強化され具体的な看護を行う自信につながることもわかりました。研究発表を通して、他領域の方々に看護本来の役割を理解していただく必要性も感じました。

◆ホスピスの看護師が死生観を深めていく時には、家族との関係・チームとの相互作用が重要とのことだった。それは特殊な環境だからできることであり、急性期医療の時間のない中ではどうか？これを生かす為に工夫できることがあるか。

・・・急性期医療の中でも家族との関係はあるため、予後を意識しながら関わることはできるはず。また、どのような病期の看護においても、医療チームでのカンファレンスは行われています。研究者のいる病院においても、全例ではないが時間外にデス・カンファレンスを行っています。急性期医療の中でも死を意識することにより行っていくことは可能と考えます。

◆「熟達」が何をイメージしているのか？「死にゆく人と向き合えるプロセス」としても良いのではないか。

・・・「熟達」は、看護師自身が「死にゆく人と向き合える」ことと同時に家族・医療チームとの相互作用の中で、他者へも影響を及ぼしていくことも含めて考えたいと思っています。

◆水戸先生コメント：データそのものと研究テーマと問題意識と分析は一致していないのではないか。ホスピス看護師と患者・家族、チームとの現象はあるのだろうが、このデータからはフィットしない。

・・・提示した分析ワークシートの部分が分析を始めた部分と異なっていたため、わかりにくい説明になってしまいました。分析テーマに基づいて分析し始めた部分では、分析

テーマと一致したデータを拾えていると思ったのですが。

◆木下先生コメント：印象としては、実際のデータをうまく生かせていない気がした。結果もこのデータだからこのような解釈が成り立つというような説得力がない。問題は問いの立て方、自分は本当に何を明らかにしようとしているのかがきちっとセットできていないということ。分析は、何かが新しく理解できていくような過程で進んでいくことが望ましい。今日は研究テーマの話なのか分析テーマの話なのかごっちゃになっていて、資料が混乱していると思った。

分析テーマにこだわりきってデータを見ていくことで、着目するところも自ずからそれに関連した部分になるはず。「ホスピス看護師が、死を恐れず、チームの一員として、個別性に基づきケアができるようになるプロセス」を分析テーマとするのであれば、これに対しての答えが結論になる。その場合に「熟練」は分析テーマには入ってこない。やはり「個別性に基づくケアができるようになるプロセス」それを明らかにするというのが全て。死を恐れるか否かは、分析の結果で明らかにすべきことで、分析テーマというのは緩やかにオープンに設定するもの。分析の密度も決まってくるくらい、分析テーマが非常に重要だということ。

・もう一つ、ホスピスだから当然ケアの考え方とかあるわけで「何でホスピス病棟で働くように決めたんですか」そういうところから質問ができるような気がする。

・解釈についてのヒントとして、今日の資料で一番興味を引かれたのは「分析焦点者の発言には、隠語や代名詞が多く含まれている」これはいったい何だろう？と。うまく言語化できない何かをその場に居る人たちで了解できるような形の表現だとすれば、そこを細かく見ていくとこの場でのナース達の受け止め方だとか、とりあえずの共通理解、他ではない何かにつながっていくのかなと思った。こういう言葉に関して、問いをだんだん絞るなどの作業をしていくと必ず独自の分析概念が作れるもの。

感想

分析には分析焦点者と、分析テーマが大事といわれ頭ではわかっていたつもりでしたが、分析テーマを絞る時には更に自分の問題関心にこだわって、何を本当に明らかにしたいのかをデータの中に見いだしていくことが重要だとわかりました。皆様のご意見ご質問にお答えする中で、状況を傍観するのではなく研究者の感性で捉えた問題意識を追求するのだと実感できました。分析テーマに余計な条件はかけてみたものの結果的に本来のポイントが定まっていなかったために、概念の数も多数になってしまったのだと考えられました。様々なご意見ご指摘ありがとうございました。

【SV コメント】

水戸美津子（自治医科大学）

発表いただいた「ホスピス看護師が熟達していくプロセス—死生観の変化に着目して」は、大西潤子さんが現在勤務する急性期病院の看護師のターミナルケアに生かせるのではないかとの問題関心から出発しているとのこと説明が当日ありました。そのため、死生観がホスピス看護師の中でどう成長していくのかを明らかにしたいとのこと発言でした。

また、ホスピス看護師が熟達していくとはどのようなことを指しているのかとの問いには、終末期看護に熟達し「死を恐れなくなっていくこと、死と向き合うことができること」とのご説明でした。しかし、当日提示されていたデータを拝見する限り、大西さんの問題関心とデータが語っていることが違うのではないかと感触を持ちました。フロアからのご質問もそのようなところから出ていたように思います。まず、データをとことん読み込んでみることをお勧めします。

大西さん自身が、自分の問題関心を掘り下げて考えてみることに、データをよくみてデータが語る意味をよく見極めることが大事だと思いました。そこから、分析テーマを絞り込んでいけるといいのではないのでしょうか。ぜひ、また、ご報告いただければと思います。

【第2報告 研究発表】

「カタールにおける日本語学習者の学習動機」

根本 愛子(一橋大学大学院言語社会研究科第2部門博士課程)

0. 本研究の位置づけ

(1) 研究の背景

海外における日本語学習者の数は2009年には133カ国・地域で約356万人となったが、2000年前後からその学習動機として「日本のポップカルチャー」が注目されている。カタールでも「日本のポップカルチャーが好きで、日本語を習いたい」という日本語学習希望者が増加したという。これを受け、2006年12月よりカタール教育省(当時)附属語学教育センター(The Language Teaching Institute、以下LTI)に一般社会人を対象とする2年間全6レベル(旧JLPT3級レベル)の日本語講座が開講された。しかし、2010年閉校までの間で、課程修了が可能であった時期に日本語講座受講を開始した70名中、修了者は12名(17.1%)であった。一方、開始から1年後のレベル3までで50名(71.4%)、JLPT旧4級修了レベルのレベル4までで55名(78.6%)が講座から離れており、継続率は低いものであった。

一方、国内唯一の国立大学であるカタール大学(Qatar University)では2006年9月より日本アニメ・ファンを中心とする「日本クラブ(The Japan Club、以下QUJC)」が大学公認団体として活動を開始した。当然、QUJC所属学生がLTIの日本語講座を受講することが期待されたが、100名とも200名ともいわれる所属学生はLTIの日本語講座にはほとんど興味を示さなかった。

以上のことから、LTI 日本語講座設置の理由が果たして正しかったのかという疑問がある。また、「日本のポップカルチャーに興味があるという学習者が日本語学習を開始するとは限らず、開始しても継続できるとは限らない」ということが言える。

(2) 日本語教育と「日本のポップカルチャー」

2006 年以後、日本のポップカルチャーを海外へ売り込んでいくようになったが、これは日本語教育の分野にも影響を与えた。2008 年に海外交流審議会から出された『日本の発信力強化のための 5 つの提言』では、「世界的なポップカルチャー人気を活かした日本語・日本文化の発信」が骨子の一つとされており、「日本の『ポップカルチャー』への興味を契機とした日本語学習者に対する日本語教育の需要増大に対応する」ことがあげられている。また、同時期には国際交流基金は若者向け初級日本語映像教材としてアニメキャラクターを登場させる「エリンが挑戦！にほんごできます」を作成し、2006 年から NHK で放送を始めた。また、インターネットでは「NIHONGO e な」の中でアニメやマンガでよく使われる表現を紹介する「アニメ・マンガの日本語」を設けている。

このように日本語教育と日本のポップカルチャーがつなげられているが、この問題点は 2 点あると考える。まず、一点目は「日本のポップカルチャーに興味がある者は日本語学習を開始する」「日本語学習者は日本のポップカルチャーに興味がある」という前提があるということである。確かに日本語学習者の中には「日本のアニメやドラマ」が好きだという者が多くいる。しかし、それが日本語学習の開始および継続のための動機なのであろうか。「日本のポップカルチャー」に注目するあまり、他の重要な学習動機を見逃していないだろうか。また、日本語学習者と「日本のポップカルチャー」のつながりを強調しすぎることによって誤った日本語学習者像を作り上げてはいないだろうか。二点目は『日本の発信力強化のための 5 つの提言』でも指摘されているように、こうしたポップカルチャー人気が続くとは限らないという点である。そのためには、ポップカルチャー人気が増す前に、ポップカルチャーに頼らない日本語教育の確立が必要ではないだろうか。

日本のポップカルチャーに興味がある者の中でも、日本語学習を開始する者としなない者がおり、さらに、継続する者としなない者がいる。そこには何らかの差があるはずである。また、日本語学習動機はポップカルチャー以外にも存在しているはずである。これらを明らかにしなければ、現在の日本語学習者像は見てこない上に、ポップカルチャーに依存しない日本語教育の確立は難しいと思われる。そのためには日本語学習者の学習動機を明らかにすることが必要である。

(3) 「日本のポップカルチャー」とは

近年、日本語学習動機として注目されている「日本のポップカルチャー」とは、一体何であろうか。

国際交流基金の調査をみると、1998 年調査では「日本のサブカルチャー」が動機の一つ

であると報告されているが、2003 年調査では「多くの国で、日本のマンガ、アニメ、ファッション、ゲーム、映画などのポップカルチャーに対する関心から日本語学習を始める若者が増えている」という報告がある。2009 年調査では学習目的を問う項目に、新たに「日本文化(アニメ・ドラマ・J-POP 等)に関する知識・情報を得るため」が付け加えられている。ここでは「ポップカルチャー」という語は用いられていないが、この新たな項目が以前の「日本のサブカルチャー」「ポップカルチャー」を指すことは明らかである。

中村(2006)は「ポップカルチャー」を確定的に定義づけるのは難しいとしたうえで、「古典・伝統芸術や貴族文化に対抗する概念としての『流行文化』や『大衆文化』として、緩くとらえ、ジャンルとしては「マンガ、アニメ、ゲームといった日本の得意分野や、映画、軽音楽といったアメリカの得意分野、ウェブ、ケータイといったデジタルの新分野、ファッション、オモチャ、スポーツ、風俗などメディアコンテンツ以外のものも含む」とする。しかし、高橋(2008)は「ポップカルチャー」という言葉は強烈なイメージが外部から付加されたものだとして指摘する。「ポップカルチャー」という言葉を日本政府が使う場合、常に「ジャパン・クール」などに象徴される「日本はカッコいい」という肯定的な日本観を伴っており、具体的には「マンガ、ゲーム、アニメなど」を指しているという。さらに、2008 年度からはこの「など」にはそれ以外を受け付けない排他力を持ち始めたという。

このように、「日本のポップカルチャー」とは、その範囲がはっきりとしていない上に、特定のイメージを添付されているということもあり、曖昧なものである。本研究ではこの日本語学習動機として注目されている「日本のポップカルチャー」を、国際交流基金の質問項目に合わせその範囲を「アニメ、ドラマ、J-POP 等」とし、曖昧さを伴う言葉として「」つきで表わすこととする。

(4) 学習動機にまつわる先行研究

第二言語習得に関する動機研究の出発点となるのは、Gardner & Lambert(1972)の古典的動機づけであろう。これはある時点で「なぜその言語を学習するのか」というある一時点に焦点をあてている。一方、ドルニエイ(2005)はこの学習動機とは「なぜ人が何かをやろうと決定するのか(why)、どのくらい熱心に取り組むのか(how hard)、そして、どのくらいの期間その活動に意欲的に取り組むことができるのか(how long)を明らかにする」としてしている。これは、学習動機とは開始から継続までのプロセスを持つものであると規定していると考えられる。

海外における日本語学習動機については、縫部ら(1995)、成田(1998)、郭ら(2001)のように質問紙調査から因子分析を行うものが多く見られ、ここからは学習動機として「日本のポップカルチャー」に相当するものが抽出されている。しかし、これらは開始した時の動機、または調査した時点での継続のための動機というある一点の動機しか検討できない。近年では羅(2005)、田村(2009)のようにある特定の学習者に焦点をあてたインタビュー調査による学習動機研究も見られるが、ここからは「日本のポップカルチャー」以外の学習

動機が大きいとされる。

そこで、本研究では、ある特定の学習者集団がどのようなプロセスを経て日本語学習を開始し、継続しているのかに注目することで、その学習者集団の日本語学習動機が明らかにしたい。

(5) パイロット調査

まず、カタール国内において LTI 日本語学習者 (30 名) の学習動機と QUJC 所属学生 (36 名) の日本に関する興味・関心の差異を見るため質問紙調査を 2008 年に行った。質問項目は 45 項目とし、質問項目ごとに t 検定を行ったところ、19 項目 (42.2%) で統計的有意差が認められた ($p < 0.05$)。うち 18 項目で QUJC メンバーの平均値の方が高かった。さらに、LTI 群および QUJC 群それぞれで、回答者ごとに全質問項目の回答の平均値 (各自平均値) および標準偏差 (各自標準偏差) を求め、それぞれ t 検定を行った。その結果、各自平均値も各自標準偏差も $p < 0.05$ となり統計的に有意な差がみられ、QUJC 群の方が平均して高い値を回答していること、LTI 群の方が回答の値にばらつきが大きいことがわかった。また、フェイスシートの分析も行ったところ、既知語 (それぞれの母語は除く) の平均数は、LTI 日本語学習者群は一人当たり 2.99 であったのに対し、QUJC 所属学生群は 1.51 であった。

以上のことから、カタールでは①日本語学習者より「日本のポップカルチャー」に興味がある者の方が、日本および日本語に関して何にでも高い興味・関心を示す傾向があること ②言語学習への興味・関心が日本語学習者の方が高いこと の 2 点が注目すべき点であるとの結論を得た。

しかし、本調査では①この差は日本語学習者 vs. 「非日本語学習者」か「日本のポップカルチャーに興味がある者」か、または「一般社会人 (大学生も含む) vs. 大学生」か ②「日本に関して特定の分野に興味がある」「言語学習への興味・関心が高い」という傾向があるから日本語学習を開始したのかどうか ③この傾向がカタール特有のものか の 3 点が明らかではなく、検討の必要がある。

そこで、これらを明らかにするため、プロセスと調査対象をより重視したインタビュー調査が有効であると考えた。

(6) 調査の範囲

以上を踏まえ、カタールにおいて LTI 日本語学習者 10 名、QUJC 所属学生 15 名にインタビュー調査を行った。また、比較のためトルコの国立大学でも日本語講座所属学生 28 名にインタビューを行った。これらを分析し、日本語学習者の学習動機を明らかにしたい。

今回の発表では、この中のカタール LTI 日本語学習者 10 名のインタビューを扱う。

1. M-GTA に適した研究であるかどうか

本研究は以下の点から M-GTA に適していると考えた。

- ①学習動機はプロセスを持つという点：ドルニエイ(2005)の定義からも言えるように、学習動機はプロセスを持つ。人が何らかの言語学習を開始しようとする時、その決定はある一時点でのみされるものではなく、過去の様々な経験の積み重ねでされるものであると考える。
- ②言語の学習者は常に社会的相互作用の場にいるという点：学習することで「教師」「他の学習者」だけでなく、「非学習者」との相互作用が見られる。また、言語はコミュニケーションの道具であるということを考えれば、言語使用にはその相手が必要であり、ここでもまた相互作用が生まれる。

2. 研究テーマ

カタールの日本語学習者の学習動機～初級レベル終了学習者の日本語学習プロセス

3. 分析テーマへの絞込み

最初は「学習動機」を漠然と捉えていたため、インタビュー対象をLTI日本語講座の受講者としようとした。しかし、受講者の継続率が低いことを考えると、それでは学習を開始するための動機しか明らかにならない。そこで、「日本語学習を継続した者」に限定し、インタビュー対象は「LTI日本語講座修了者」とした。これは「初級レベルが終了した日本語学習者」を意味する。また、そこで同レベルであればと民間語学学校の学習者にもインタビューを考えた。しかし、この民間語学学校では文字教育を行わないことから、対象から外すこととした。これは仮にこの民間語学学校で学習を継続しても、4技能のバランスが取れておらず、「初級終了レベル」とは言い難いためである。そこで、本研究で扱う「日本語学習を継続した学習者」とは「4 技能のバランスが取れた初級レベル終了程度の学習者」とした。そこで「カタールで初級レベル終了程度まで日本語学習を継続した者の日本語学習のプロセス」を分析テーマとすることとした。

4. データの収集法と範囲

LTI日本語講座修了者10名に2009年12月から2010年5月の間に30分～1時間の半構造化インタビューを行った。インタビューガイド(英語)を示し、インタビューの録音および文字化、インタビューの目的および内容を理解してもらった。インタビュー項目は ①言語経験(母語、学習言語、習得言語など)について ②日本との最初の出会いについて ③日本語学習を開始を決意した理由 ④日本語学習開始後の興味の変化 ⑤日本語学習のゴール ⑥(大学生または大学卒業生のみ)日本クラブについて の5点ないし6点とした。インタビューでの使用言語は英語または日本語からインタビューイ本人に選択してもらった。9名が日本語、1名が英語の使用を選択した。また、インタビューイとインタビュアーの関係は日本語学習者とその教師である点、考慮が必要である。

現段階で10名のインタビューは終了しており、追加予定はない。今発表ではうち4人分の

分析となっている。

5. 分析焦点者の設定

カタールで初級レベルが終了した日本語学習者(=LTI日本語講座修了者)

6. 分析ワークシート

例「新たな日本の発見」(省略)

7. カテゴリー生成：概念の比較をどのように進めたかを具体例をあげて説明する

現時点では4名分のインタビューデータの分析が終了したところである。現段階では5つのカテゴリーと28の概念を生成した。10名全員のデータからの概念生成が終了したら、再検討が必要であると考えている。

カテゴリーの生成には、まず、概念を生成している時からプロセスを意識し、ある概念が他の概念とどのような関係になっているのかをノートにメモしていった。すると、インタビューの際にすでに「言語経験」と「日本との関わり」を話してもらっていることから、大枠ではそれぞれカテゴリーとなることに気づいた。それから「その枠がどこで破られるか」「そこから派生するものは何か」を意識しながら、また、理論的メモを参考にして結果図を作成した。そして、インタビューを見直しながら結果図の訂正を加えていった。例えば、【言語学習力】は以下の通りである。

多くの学習者が「〇〇(フランス、ドイツ、ペルシアなど)語を習った」「英語が好きだった」ということから、【言語学習への高い興味】というカテゴリーを生成した。しかし、この「英語」と「〇〇語」についての語りが異なることに気がついた。〇〇語は自らの意思で選択しており、日本の情報収集には関連していない。しかし、英語は幼少時代から常に接していること、第二言語として自然習得していることが語られている。さらに、日本に関する情報収集に利用することと、英語力を高めることがスパイラルの関係になっている。学習理由も〇〇語は「言語学習が好きだから」であるが、英語はこれに加えて「必要だから」となっている。そこで、【英語学習】と【言語学習への興味】というカテゴリーに分けることとした。

しかし、再度、分析ワークシートと理論メモを参照し、概念同士のつながりを検討したところ、言語の種類では分析テーマが説明できないことがわかった。そのため、【言語学習への興味】の概念で日本語学習開始のカテゴリーとの関連が強いものはそちらに移動させ、残りの概念と【英語学習】にある概念でどのようなカテゴリーが生成できるのかを検討した。その結果、【言語学習力】というカテゴリーを生成した。

8. 結果図：(省略)

9. ストーリーライン：(省略)

10. 理論的メモ

- ・ ノートをどのようにつけたか、また、いつ、どのような着想、解釈的アイデアを得たか。現象特性をどのように考えたか（考えたとすれば、です）。
- ・ 最初に概念を作った時に欲張りすぎて失敗したので、改めて分析をした時には一つの概念を生成する際に常に「なぜこの概念があるのか」「この反対は何か」を考え、理論的メモに記入した。
- ・ ヴァリエーションを追加する時に「自分はなぜこのヴァリエーションをこの概念に加えようとしているのか」を意識するようにした。

11. 分析を振り返って、M-GTAに関して理解できた点、よく理解できない点、疑問点など

- ・ 概念を生成することが難しい：最初は欲張ってしまったことと、分析テーマがはっきりしていなかったことから、概念がただのヴァリエーションの分類になってしまった。そのため、概念の数が非常に多くなってしまった。
- ・ 結果図とストーリーラインが乱雑になってしまっている：一つの概念が他の複数の概念へとつながっていたり、いくつかのプロセスが並行したりしているので、見苦しい・読みづらいものとなってしまっている。（概念がまだまだ抽象化されていないから？）→木下先生SV「コアを明確化すること」
- ・ カテゴリーをどう生成するのか迷った：カテゴリーの中でもプロセスがあるが、並行しているプロセスがいくつかある場合、時間ごとにカテゴリーを生成した方がいいのだろうかと思ってしまった。

(脚注・参考文献は省略いたしました)

【当日いただいた主なご意見・ご質問】

- ・ 分析テーマは日本語学習者が日本語学習をプロセスだが、単純に「どのようなプロセスを経て継続にいたったのか」なのか、それとも葛藤など「継続のための困難を乗り越えるプロセス」なのか
- ・ 結果図をもっとストーリーラインに反映させる必要がある。
- ・ いくつかの概念名は、ストーリーラインの中のその説明の方が興味深い。概念名の付け方を再考する必要があるのではないか。
- ・ 重要な相互作用の相手が概念として独立したり、中に入ったりしているのはおかしい。現象を説明できるような概念名にすべき。
- ・ 研究の位置づけなどからすると、メディアの関わりが重要なのではないか。データ分析や概念についてもっと緻密に扱う必要がある。

- ・日本語学習者に対して日本語でのインタビューだが、問題はなかったのか。
- ・概念を生成する時の妥当性はどうか。

【発表を終えて】

この度は発表の機会をいただき、ありがとうございました。入会してまだ間もない私が発表することは非常に有機のいることでしたが、発表させていただいて本当に良かったです。木下先生をはじめ、皆さまからいろいろなご指摘、ご質問をいただき、先が開けたような気持ちになりました。また、発表後もいろいろな方に声をかけていただき、フロアからのご指摘を整理することができました。

今回発表させていただけたお陰で、今まで自分の中ではっきりしていなかったことは何かが見えてきました。そして、今までなぜ前に進めなかったのか、違和感があったのはどうしてか、ということがわかった気がします。皆さまからのご指摘で、特に、今まで「社会的相互作用」をよく理解できていなかったことがわかりました。発表の後で、再度木下先生のご著書や会報のバックナンバーを読んだのですが、前には気がつかなかったこと、わからなかったことが「こういうことだったのか」とすっきりしました。また、今まで自分の研究テーマは本当に M-GTA に適しているのかという不安があったのですが、今ではこの不安もなくなりました。今まで足踏みしていましたが、これからはもう少し自信を持って、自分の研究を進めていきたいと思います。

【SV コメント】

木下康仁（立教大学）

根本さんの報告についてだけでなく M-GTA に関する重要な点も含めて、要点をまとめました。

・研究の目的と意義、先行研究の批判的検討、研究全体の中での今回の報告部分の位置づけなど、全体として論理的にしっかりとしていると感じた。

・分析テーマを「カタールで初級レベル終了程度まで日本語学習を継続した者の日本語学習のプロセス」とし、分析焦点者を「カタールで初級レベルが終了した日本語学習者（＝LTI 日本語講座修了者）」としている。10名のインタビューを行い、4名のデータの分析についての報告であった。今回の報告に関しては、この10名分がデータのすべてである。

分析テーマも分析焦点者もかなり限定的であり、最終的な分析結果の一般化可能な範囲もそれに依じて限定されることになる。この判断は、データの収集可能性が現実的に限られていることと、データの最大活用（このデータだから解釈できること）を考慮したためと思われる。M-GTAにおける方法論的限定のひとつとしてのデータ範囲の設定である（理解

に自信のない人は復習しておいて下さい)。

したがって、この研究は言わばピンポイント型の理論生成の試みであり、カタル以外
の他地域の場合にはローカルな要因を組み込んで修正を図っていくという位置づけになる。
これは、「説明力のある理論の生成」と「データを効果的に説明できる理論」の生成の兼ね
合いとして説明してきた点である。後者の場合、一般的な傾向としていろいろな概念を盛
り込もうとして結果図が複雑なものになりやすい。大きなうごきが見えにくくなる。対照
的に、前者では細かなところまでは盛り込めなくても、大きなうごきをプロセスとして示
すことを重視する。兼ね合いがむずかしいところであるが、M-GTAは前者のタイプの理論生
成を目的とするが、さまざまな条件や事情により個々の研究においてはどちらに比重をお
くかを研究者が自覚的に判断する。別な言い方をすると、前者は分析焦点者との組み合わ
せで一般化可能な範囲を明確に提示できるので応用しやすいのに対して、後者のタイプは
理解しやすいが応用者による修正作業が大きくなるという関係になる。方法論的限定のか
け方と同様、自分の判断理由を明らかにし、論文においても記述する。少なくとも、自分
がしていることが前者なのか後者なのかあいまいな状態は避けなくてはならない。

・根本さんは M-GTA の根幹をよく理解していて、解釈にあたりあれこれと迷い、悩んでい
る。これはとても重要なことで解釈すべき意味を多角的に検討する作業なので、分析の密
度を上げていくことにつながる。

・概念生成のむずかしさが感想で述べられていたが、これは M-GTA を試みる多くの人が経
験している問題でもあるので、根本報告から離れるが改めて、実際にどのようにして突破
するかを説明する。ポイントは、自分の解釈の適切さをどのように判断したらよいかであ
る。これには二つの方法があり、一つは自分からみて出来栄えのよい概念（言わば見本概
念）がどれかあるかを考えること。データとのフィット加減がよく、説明力に関して自
分自身にとってリアリティ感があるもの。分析テーマと分析焦点者の2点に集中して考え、
自分の研究の意義と調査に協力してくれ人々への責任を意識すると、判断できるものであ
る。スーパーヴァイザーとしてかかわる場合には、分析者が見本概念を確実にもてるよう
にするとよい。

もう一つの方法は概念単体としてではなく他の概念との比較関係から判断することであ
る。こちらの方が重要である。この作業は分析を成功させるためにも決定的に重要で、概
念を個別に比較していくと、ばらついていた概念の関係が見えてきてカテゴリーについて
アイデアが出てくる。概念がたくさんできてしまう問題はこの比較検討作業により水準設
定されていくので解決できる。M-GTA ではこうした調整が自然にできるようになっている。

概念がたくさんできて困るのであれば、概念間の比較検討が著しく不十分だと考える。
カテゴリーもあいまいで、分類・要約的なまとめとなり、分析全体が見えてこないもので
ある。

【第3報告 研究発表】**「ひきこもりの同胞をもつきょうだいが自分の生活を安定させていくプロセス」****和田 美香（厚木市立病院小児科）****問題の所在****（1）ひきこもり**

ひきこもりは、「さまざまな要因の結果として社会参加（義務教育を含む就学、非常勤職を含む就労、家庭外での交遊など）を回避し、原則的には6ヶ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態を指す現象概念」とされる（ガイドライン, 2010）。社会参加の回避が長期化し社会生活の再開が著しく困難になったため、ひきこもる本人や家族が大きな不安を抱えるようになった場合、支援の対象となる。

（2）ひきこもりの家族におけるきょうだい

ひきこもりの家族においては、本人に生活上のさまざまな問題行動が生じ（齊藤, 1998）、それにより家族の緊張が高まり、家族機能や精神的健康度の低下が見られる（小林ら, 2003）。家族は日々の対応の困難やコミュニケーションの障害を抱え、親は他のきょうだいへの影響を気にしている（天谷ら, 2003）。ひきこもりの支援では、家族の機能不全も支援の重要な対象となるが（ガイドライン, 2010）、現状では主に親を対象とし、さまざまな影響を受けると考えられるきょうだいは見過ごされがちである。この状況を背景にきょうだいを対象とした研究は蓄積に乏しい。

しかし、「東京都ひきこもりサポートネット」などのネット相談には、きょうだいからの相談も多く、不安や困難を感じる切実な問題であることが示唆される。支援団体で接することのあるきょうだいからは、「相談できる場所がない」「相談に行っても受け入れられていない感じがする」といった声が聞かれる。ある子どもがひきこもり状態になると、次々に他のきょうだいと同じようなことになる場合もある（田中, 2001）との指摘や、ひきこもりの長期化とそれに伴う親の高齢化が報告されつつある中で、きょうだいの心理的な負担が大きいことが推察される。一方で、多くのきょうだいは、影響を受けながらも自身がひきこもることなく、ある程度自分の生活を送っているともいえる。このことから、きょうだいが多様な家族状況の中で、どのように感じながらどう自分の生活を安定させているのかについて検討することは、適切な支援のために重要だと考えられる。

（3）きょうだい関係

きょうだい関係は、子どもの自己形成や社会化において大きな役割を果たすとされるが（白佐, 2004）、同胞がひきこもることで発達上の体験が損なわれる可能性が考えられる。きょうだい研究の文脈において、柳澤（2005）は、障害児・者のきょうだいが中学生以上になると、自己意識の高まりや自我同一性の確立に伴い、同胞の存在を通しての他者意識が高まり困惑が増すことを報告している。このことから、ひきこもりの同胞をもつきょうだいの体験内容は、発達段階やひきこもりの経過と伴に変化すると考えられる。

目的

思春期・青年期に、同胞がひきこもることにより、きょうだい家族の中でどのような体験をしよう感じているのか、どのように関わりながら自分の生活を安定させていくのかについて、そのプロセスを明らかにすることを目的とする。それにより、きょうだいについて理解を深め、適切な心理的な支援のあり方について検討する。

1. M-GTAに適した研究であるかどうか

本研究は、以下の点でM-GTAに適していると考えた。

- ① ひきこもりの同胞をもつきょうだいと家族との社会的相互作用に関わる研究である。
- ② ひきこもりの支援（特に、きょうだい支援）というヒューマンサービス領域の研究である。また、ひきこもりの同胞をもつきょうだいと関わることのある精神保健・医療・福祉・教育などの実践現場における職員が、きょうだいを理解するためのモデルを提示する研究である。
- ③ きょうだいの体験に基づく感情の動きや関わりの変化、複雑な家族状況の中で生活を安定させていくプロセス的性格を持っている。

2. 研究テーマ

ひきこもりの同胞をもつきょうだい自分の生活を安定させていくプロセス

3. 分析テーマへの絞り込み

<修正前> ひきこもりの同胞をもつきょうだいの主観的体験のプロセス

⇒「主観的体験」という言葉の抽象度が高く、家族の相互作用を通してのきょうだいに特有な体験とそれに基づく感情や関わりの変化などについて、適切に表現できていないと思われた。

<修正後> ひきこもりの同胞をもつきょうだい、特有の体験に基づく感情や関わりを持ちながら、自分の生活を安定させていくプロセス

4. データの収集法と範囲

(1) データの収集法

ひきこもり状態の同胞をもつきょうだい14名に、半構造化インタビューを2回（1回目：約1時間半、2回目：約1時間）実施した。支援団体に協力を依頼し、支援者やカウンセラーから調査協力者を紹介してもらう方法を用いた。調査期間は、2008年7月から12月であった。インタビューデータは協力者の同意を得た上でICレコーダに録音した。

○倫理的配慮

調査依頼時および実施前に、調査目的や実施方法について丁寧に説明した。また、データは研究目的でのみ使用すること、プライバシーの保護などについて説明し了解を得た。

○インタビューガイド

協力者の話しやすいところから自由に語っていただいて構わないことを伝え、ガイド項目について時系列に沿って聞いていった。流れに応じて、そのときどのような気持ちだったかなど、語りの内容を引き出す質問を適宜加えた。

ガイド項目：①ひきこもりのきっかけ、②ひきこもりの経緯（ひきこもりの始めのとき・一番状態が悪かったとき・状態が回復してきたとき）、③家族の関わりの中で印象に残る出来事、④悩みや困難に感じたこと、⑤同胞によって受けたと思われる影響

（２）データの範囲

調査協力者は、以下の項目を満たしている人を対象とした。

- ① 過去に６ヶ月以上のひきこもり状態になり、現在はある程度回復している人のきょうだいとする。問題の渦中にある人（きょうだいを含めて）を対象にすることの倫理的問題や、きょうだいの体験内容がひきこもりの経過とともに変化する側面があると考えられた。居場所に参加するなどの回復が見られる人のきょうだいとすることで、より適切で有用なデータが得られると考えた。
- ② 思春期・青年期に、同胞のひきこもり状態を体験したきょうだいとする。発達の上により自己意識の高まりや自我同一性の確立に向けて、同胞の存在から多くの影響を受けるとされることから、この発達段階が重要であると考えた。

５．分析焦点者の設定

思春期・青年期に、同胞が６ヶ月以上のひきこもり状態になり現在はある程度回復している、そのきょうだい

６．分析ワークシート

調査を進めていく中で、年少きょうだいと年長きょうだいとは体験内容に違いが見られ、それぞれのきょうだいに特徴的な面があると思われた。そこで、両者をステップに分けて分析した方が、各々に特有の概念が見出せるのではないかと考えた。

○ステップ１

具体的な内容がより豊富であると考えられた年少きょうだい７名の分析を行い、基礎となる概念を生成した。

○ステップ２

対象の属性を拡大し、年長きょうだい７名の分析を行った。ステップ１の概念を利用しつつ、概念の修正や再構成をしたり、新たな概念を生成した。

概念例（別紙：省略）

７．カテゴリー生成（省略）

8. 結果図（別紙：省略）

9. ストーリーライン（省略）

<主な質問やコメント>

- ・ 結果図に納得しているか。また、プロセスによって支援の方法は違ってくるのか。
- ・ 「閉塞感」から「自律」にいたる変化において、どのような相互作用があるのか。例えば、家族以外の友達とのやり取りが、どのように影響するのか。
- ・ 「相手を変えたい」というところから「自分を変えたい」に変わる、相互作用の質の違いはどうか。
- ・ 家族システムの変化を扱っているのではないか。また、アイデンティティの確立といったことを含んでいると思う。
- ・ 生活を安定させていくプロセスということだが、生活にはもっと色んなものが含まれると考えられる。結果からは、あまり生活という感じがしない。
- ・ 質問項目において印象に残る出来事だけでなく、日常的な事を聞いていけばいいのではないか。
- ・ もっとドロドロとしているものではないか。ひきこもりならではのものがあればいい。
- ・ 分析テーマが違うのではと思う。
- ・ 研究者の立場や理論的な背景を、明確にしておく必要がある。

<発表を終えての感想>

この度は、発表の機会をいただき感謝しております。発表の準備を進めていく中で、M-GTAがどういった方法なのかということについて、改めて理解できたように思います。特に、研究テーマ、分析テーマ、分析焦点者の設定については、その重要性を身にしみて学びました。研究で何を検討したいのかを突き詰めて考え、明確に設定することで、研究の目的地がはっきり意識され、分析過程が安定するのだと分かりました。また、その際には研究者の立場や理論的背景を、明確にしておく必要があるのだと思いました。

準備段階からスーパービジョンをしていただいたり、フロアの先生方や皆様からご質問やコメントをいただき、自分がもつ視点を客観的に見ることや、盲点となっていたものに気づくことができました。今後は、この研究で明らかにしたいことを再度見直し、言語化できていないものを適切に表現することや、相互作用で捉え切れていないところの概念化などについて、さらに検討していきたいと思います。

小倉先生、木下先生、フロアの先生方および皆様に、心よりお礼申し上げます。

【SV コメント】

小倉啓子（ヤマザキ学園大学）

1. 問題意識と研究の意義

心理臨床の現場では、不登校をはじめさまざまな形のひきこもり状態にある本人や親との面談、相談は多い。強い衝撃や混乱、不安を経験している本人や親に出会うこともしばしばである。

ひきこもりの同胞をもつきょうだいもそれぞれの形で動揺し、悩んでいると考えられるが、きょうだいがカウンセリングなどの場に登場することはほとんどなく、和田さんが提議されているようにきょうだいへの援助的関わりは後回しになっていると思われる。こうした現状をみても、和田さんの問題意識、研究テーマは重要で社会的意義があると思う。

2. M-GTAに適した研究であるか

きょうだいが、同胞のひきこもりに発した家庭やきょうだい自身の混乱状態から、自分なりに生活を安定させていくまでにはある期間独自のプロセスをたどると考えられる。そのプロセスを明らかにすることによって援助的示唆が得られることが期待される。これらの点からも M-GTA は適した方法ではないか。

3. 検討が必要と思われる課題

① 分析テーマと結果が一致しているか。

フロアから指摘があったように、結果から生活の安定プロセスが読み取れ、それに読者が納得出来るかどうか。この点が弱いような気がする。どんな「生活」からどんな「生活」に変化したのか、その変化へと動かしていた「動き」は何かという「生活」の中身も見えにくいように感じる。

「安定」に関するカテゴリーは＜家族からの自律＞ひとつだけなので、「安定」のイメージが湧きにくく、結果図は「生活の安定プロセス」の説明には届いていないように感じられる。「生活の安定」をパワフルに説明出来るような具体的データはないだろうか。あるのであれば、このテーマで再分析をするのも一案と思う。

和田さんは臨床現場に身を置いて、きっと強く疑問に、不思議に思われていることがあるに違いない。現場にいてきょうだいの「生活」「安定」の何を知りたいと思うようになられたのか、何を捉えれば援助になると考えておられるのか。臨床感覚に信頼して本当に「これ」を知ることが大事だと思われることを精練し、問題設定をされたらいかがかと思う。

家族システム理論で第一次変化と第二次変化という概念があるのはご存知と思う。

私は、第一次変化を試して効果がなくて閉塞感を経験し、ついに第二次変化を自分のなかに起こして自立・自律していく過程というイメージが浮かんだ（個人的なイメージです）。

② 具体的で繊細なデータに着目する

分析ワークシートの具体例を見ると、整理された語りという印象を受ける。こうしたデータから対象者の生き生きした体験を深く掘り下げ解釈することは少し難しいと感じる。

おばあさんとのやり取りがあったが、そうした日常的で何気なく具体的、生き生きした行動、感情、認識を示したデータがあれば、それを大事にされたらと思う。M-GTAの良さの一つはそういう繊細なデータを深く解釈するところにあると考えるので、試されても良いかと思う。 以上

【第4報告 研究発表】

「成年後見制度における第三者後見人成立プロセスの研究—社会福祉士を焦点として」

福元公子（首都大学東京大学院博士課程後期D3）

今回の構想発表は、博士論文「成年後見制度における第三者後見人成立プロセス」の中の第Ⅴ章「社会福祉士を焦点とした第三者後見人モデルの構築」に該当する研究であります。

I. 研究背景

世界的に高齢化社会の問題は多い。日本でも2009年の65歳以上の高齢者の割合は22.7%であり、75歳以上の高齢者は1370万人で人口の1割を占める。2055年には4人に1人が75歳以上になると予測されている。特にわが国においては、大家族主義から核家族化、昨今では独り世帯の増加へと生活形態の変化は著しく、こうした状況に対応するために平成12年に4月に契約に基づく介護保険制度と法定後見制度（成年後見制度、任意後見制度）は同時施行され10年を経過した。

成年後見制度とは、明治憲法の禁治産・準禁治産制度およびこれを前提とする後見・保佐制度が利用しにくい物であったことから改正された新たな成年後見制度は、自己決定権の尊重、残存能力の活用、ノーマライゼーションなどの新しい理念と、従来の本人の保護を優先する理念との調和を旨として、各人の個別の状況に応じた柔軟で弾力的な利用しやすいことを目的として策定されたものである。

また、介護保険法の施行にあたり、認知症、知的障害、精神障害等の精神障害上の障害により、契約締結等の法律行為における意思決定が困難な人々に対して成年後見制度（後見人等）はその判断能力を補い、権利や利益を保護する制度である。

種類	本人の判断能力	援助者
後見	判断能力を欠くのが常の状態にある人	成年後見人
保佐	判断能力が著しく不十分	保佐人
補助	判断能力が不十分	補助人

明治憲法での禁治産・準禁治産制度における後見人は親族から選任されることが旨とされていたが、新たな成年後見制度では、専門職（弁護士・司法書士・社会福祉士等）から

第三者後見人として選任されることが多くなってきた。しかし、専門家による第三者後見人の実像は一部関係者にしか認知されてはおらず、成年後見制度の活用を進めるうえにも、どのような専門性に基づいた人々が成年後見人等に選任されているのか、またその活動実態を明らかにすることが必要となった。

わが国における成年後見制度の実績（最高裁判所事務局家庭局実情調査に基づく発表資料）

	平成 12 年	平成 13 年	平成 14 年	平成 15 年	平成 16 年	平成 17 年	平成 18 年	平成 19 年	平成 20 年
後見等開始事件	6,693 (100)	10,488 (157)	13,983 (209)	16,930 (253)	17,129 (256)	20,124 (301)	32,125 (480)	24,727 (369)	26,459 (395)

注：（）内数字
は平成 12 年比

<成年後見人等と本人の関係割合（平成 20 年）>

（最高裁判所事務局家庭局実情調査に基づく発表資料）

親族（配偶者・親・子・兄弟姉妹・その他親族）	・・・	68.5%
第三者 弁護士	・・・	9.1%
司法書士	・・・	9.0%
社会福祉士	・・・	6.6%
その他（法人・知人・その他）	・・・	6.8%

<社会福祉士による後見等受任件数年次推移>（日本社会福祉士会発表資料）

年	平成 13 年	平成 14 年	平成 15 年	平成 16 年	平成 17 年	平成 18 年	平成 19 年	平成 20 年	平成 21 年
受任件数	42	218	661	1,301	1,951	1,814	4,891	7,140	10,189
	(100)	(52)	(158)	(310)	(465)	(432)	(1165)	(1700)	(2426)

注：（）内数字は平成 13 年
比

後見人の業務・・・財産管理と身上監護であり、身上配慮義務が課されている。

成年後見人は、成年被後見人の生活、療養看護及び財産の管理に関する事務を行うに当たっては、成年被後見人の意思を尊重し、かつ、その心身の状態及び生活の状況に配慮しなければならないと規定されている（身上配慮義務、民法 858 条）。身上監護には事実行為と法律行為があり、成年後見人の身上監護には事実行為は含まれない。

第三者後見人は多くの場合、本人の判断能力が低下した段階からの関わりとなるため、認知症の記憶障害で後見人等を認知されないままに支援を開始することになる。

Ⅱ. 研究の目的と意義

第三者後見人としての価値・知識・技能を修得し、実践上の実績のある熟練した社会福祉士の後見人に焦点をあて、それらの経験・取り組みの姿勢をもとに第三者後見人のモデルの構築を試みるのが適切であると判断したからである。

第三者後見人モデルの構築とは、後見業務に携わるこれからの社会福祉士が実践の参考にしたり、現在後見業務に従事している者の自らの実践を確認するための指針として活用したりすることを目的にしたものである。

先行研究においては、成年後見制度の法的な研究は多く、特に田山（2009）、新井（2009）等の著作からは、後見人の職務について法的に多くを学ぶことができる。また、後見人等のソーシャルワークに関する先行研究では、制度とソーシャルワークの関連を論じた福田（2004）や岩田（2004）等があるが、実践者である後見人等の第三者後見人を焦点として、第三者の立場から具体的に論じた先行研究は見当たらない事からも、本研究の取組みは意義があると考ええる。

Ⅲ. M-GTAに適した研究であるかどうか

本研究は、以下の点から、M-GTAに適していると考ええる。

- ①ヒューマンサービス領域に関連した研究である。
- ②研究対象である社会福祉士が、第三者後見人としての実践をとおして成年後見制度を具現化していくプロセス性がM-GTAに適している。
- ③援助対象者は多様な問題を抱えており、後見人等としての関わりは複雑で多様な対応が必要とされ、社会福祉士の持つ専門性を駆使して長期間関わっていくプロセス性がM-GTAに適している。

Ⅳ. 研究テーマ

「成年後見制度における社会福祉士を焦点とした第三者後見人モデルの構築」

Ⅴ. 分析テーマへの絞込み

第三者後見人となる者は、社会福祉士の国家試験合格後、日本社会福祉士会に入会して会員として一定の研修を終了後に、なおかつ成年後見人養成口座研修を受講し終了した後に、権利擁護センターパートナーに名簿登録した者である。

成年後見人の職務は、被後見人等と終生の関わりとなること、財産管理という重い職務を担うことから、受任には相当の覚悟があったと思われる。そうした職務を担うことを決めた思いに焦点をあてて、先駆的に実践してきた社会福祉士が、どのようなプロセスで第

三者後見人という立場を成立させて行ったかに焦点を絞り込んだ。

VI. インタビューガイド・調査上の問いかけ

- ①社会福祉士となった経歴
- ②成年後見人となった理由・プロセス
- ③活動を通して第三者後見人としての初期・中期・現在の段階での感想
- ④第三者後見人として実践から感じる成年後見制度の課題等
- ⑤第三者後見人として今後どう取り組んでいくか。

VII. データの収集法と範囲

本研究は、社会福祉士で一定の条件の下で6名を選出し、90分から150分の半構造化インタビューを行った。

調査期間は平成22年11月～12月である。

インタビューの場所は、調査協力者の自宅、事務所等のプライバシーの守られた場所で行われた。

調査にあたっては、所属機関に調査実施の報告を行い、協力者には、研究の主旨・質問に対する拒否の自由を伝え、データは研究目的でしか使用しないこと、調査データのまとめの一定の段階で内容を提示し、回答の主旨に反していないかのデータ内容確認をすることで、今後の分析段階での協力の了解を得た。インタビューは、上記インタビューガイドを用いた。面接中はこれらの項目をガイドとして用い、質問の順番や内容は流れに沿って進めた。また、調査協力者の発表資料等も補足説明として使用した。

VIII. 分析焦点者の設定

調査協力者（調査対象者）：熟練した社会福祉士の第三者後見人
熟練した社会福祉士の第三者後見人の基準は以下の6つである。

- ①日本社会福祉士会の会員であり、同会の後見人養成研修を修了し、後見業務に先駆的に取り

組んできた実践経験と後見業務全般において指導的立場にある者。

- ②後見業務の価値、知識、技能を修得し、所属機関の倫理綱領を遵守し、業務を遂行していると思われる者。

- ③社会福祉士国家資格を取得し、社会福祉関係機関で一定の就業経験のある者。

- ④成年後見人等としての経験年数が4年以上ある者。

- ⑤勤務者ではなく、独立した立場で社会福祉士として一定数以上の受任をし業務を行っている者。

- ⑥調査者と定期的に会うことができるもの。

以上の基準を満たすものとして調査協力を得た調査協力者は6名である。

	性別	年代	経歴	社会福祉士資格以外の資格
1	男	60 歳代	行政生活保護ケースワーカー25 年、後見人 10 年、大学講師、福祉法人理事長	介護支援専門員、精神保健福祉士
2	女	60 歳代	都福祉職員 38 年、後見人 12 年	介護支援専門員、
3	男	40 歳代	一般企業から福祉施設職員 10 年、後見人 6 年	介護支援専門員、精神保健福祉士
4	女	40 歳代	一般企業から社会福祉協議会 16 年、後見人 5 年	介護支援専門員、精神保健福祉士
5	男	40 歳代	一般企業から福祉施設職員 10 年、後見人 5 年	介護支援専門員、精神保健福祉士
6	女	60 歳代	児童施設職員 10 年、社会福祉協議会 27 年、後見人 5 年	保育士、介護支援専門員

発表に対していただいたご意見

- ・社会福祉士としての業務のプロセスを明らかにする研究なのか。
- ・第三者後見人としての成立を目指したいということかが曖昧である。
- ・テーマが絞り切れていないのではないか。
- ・データをとらえて、自分のやっていることと重なるが、インタビューガイドの②、③で②のプロセスに焦点をあてているので、③でも焦点をあててしまうとこれだけでも一つのテーマとなり得るので、ぶれないかが心配になった。6 名のデータ全体での語りでどのような言葉が多く、印象に残ったのか。

SV 坂本先生

分析テーマの s v のやりとりの中で感じたことは、データの中でどのような語りが一番強い印象にあったのかがはっきりすると、テーマが掴めるのかではないか。成年後見人はこれまでの s w としての枠を超えて s w をしているので、それがどのようなことかが見えてきて概念を構成されると面白いと思う。

木下先生

M-GTA を誤解されているか。あるいは M-GTA の基本的なところがまだ理解されていないようにおもえた。受け答えも見事にずれている。熱意は伝わるが、ポイントになるところを自己流の考えに置き換えてしまっているのではないか。M-GTA は調査の道具なので、プロセスとなるどころ、制度ではなく人間はもっと現実からはみ出たところがある。法律的に枠組みの中では違いなくとも何がどう変わっていつているのか、他人の意思を代理していくプロセスで考えたときに、実際にはどうなっているか、どうなって変わっていくのかい

るのか、何をというところを問いの形に表現していったら良いのではないか。

分析焦点者は人間になる、具体的には人間になるので、複雑で矛盾の仲で社会的なことをやっている。かなり細かいところまでデータを見ていく モデルを作るというのはまだあまりに一般的になりすぎてしまっている。工夫をしていけば全体の方向性がよく見えてくるのではないか。

謝辞

発表の機会を頂きまして、データに取り組むことができました。貴重なご意見を研究に生かしてまいります。ありがとうございました。

.....

◇第4回修士論文発表会のご案内

【日時】7月16日(土) (10:20~18:00)

【場所】東京大学(本郷キャンパス、法文2号館2階、1番大教室)

【内容】成果発表2つ、構想発表2つ

(上記は、ご参考のため現時点での予定をお伝えさせて頂くものです。詳細については、決定次第、順次ご連絡させていただきます。宜しくお願いします。)

◇編集後記

・新年度を迎えて会員の皆様もお忙しいことと思います。今年度も引き続き、編集委員をさせていただきます。なにとぞよろしくお願いいたします。ニューズレターでは、会員の皆様に、会員同士のつながりをより親密に持っていただくことを願って、近況報告をお願いしております。その際には、ぜひ、快くお引き受けいただければ幸いです。ご協力よろしくお願い申し上げます。たとえば、会員の皆様には M-GTA を用いた研究論文を発表していただくことをお約束していただいたうえで、ご入会いただいておりますが、近況報告で、論文作成における日ごろの悩みなどをお知らせいただければ、より充実した企画もご用意できると思っております。ニューズレターを上手に活用して、ご研究の発展に役立てていただけることを心より願っております。今年度もよろしくお願いいたします。(林)

・先日、大宰府天満宮さまにお参りしてきました。朝早く行ったので、梅が枝餅のお店はどこもまだ空いていませんでした(泣)。ちょうどお参りした時に、神職や職員の方々がご

本殿にご参拝を始められました。HP で勉強したところ、大祓の言葉をご神前に奏上されていた由ですが、とても厳かでした。その後、お祓いとなるのですが、なんと、最後に我々参拝者の方にもお祓いをして頂きました。有難いことです。皆様の研究が、更にご発展されますように。梅が枝餅は帰り道に頂くことができました。（やっぱり焼きたては美味しかった竹下）

・佐川編集長が、熊本保健科学大学の准教授に今月めでたく着任されました。（おめでとうございます！）これは大変喜ばしいことなのですが、佐川さんが東京を離れることになってしまったのは我々の研究会にとってかなりの痛手です……（逆に九州 M-GTA 研究会の皆さんは心強いでしょう！）。っで、ニューズレター編集長が空席となったのですが、気がついたらなぜか私とそのイスに座っておりました。（竹下さんと林さんに謀られました！）不肖山崎は佐川前編集長ほどの力はありませんが、林さんと竹下さんにお力添えをいただきながら、3人で協力して、会員の皆さんにとって実り多いニューズレターを作っていければと思います。どうぞよろしくお願い致します。

編集長就任にあたって、会員の皆さんにあらためてお願いがございます。それは、M-GTA 研究会と一緒に支え盛り立てていただきたい、ということです。ニューズレターについて言えば、林さんも上で言及してくださっているように、ぜひ会員の皆さんには積極的に「近況報告」等にご協力いただきたく存じます。M-GTA を活用して研究をするという共通目的をもった会員同士、互いの経験や知恵を分かち合っていくことで、M-GTA に対する理解が深まるでしょうし、研究も楽しくなるのではないのでしょうか。編集委員や世話人は、こうした相互支援の環境作りを少しばかりお手伝いさせていただきただけであり、皆一介の会員に過ぎません。全会員一人ひとりの支えがあって、はじめてこの研究会は成り立ちます。どうかご協力のほど、重ねてよろしくお願い致します。（山崎）